

京鹿子

創刊 昭和三年三月一日發行
第一號 昭和六年六月一日發行



2月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その六十五

夜叉のごと風は枯野を袈裟がけに
大枯野行くあてのなき風の黙
病床の仄明かり冬りんご磨る
津軽には雪の名七つ冬りんご
数へ日の時を重ねて夫婦酒
アイスホッケー引き金となる無鉄砲



冬いちご真しやかに嘘育つ
着ぶくれの妻はごり押し通さざる
三度目は方便の嘘かじけ猿

歳晚吟行

洛中の風は無聊に川涸るる
宮がらす冬日まとふも神意かな
神山眠る社家町をふところに
数へ日の夫と妻との胸算用
冬蝶の終の道へと神楽岡

—
近詠

和田 照海

怒濤日和

海鳴りを漏らさぬごとく風垣組む
風垣の砦構への男結び
風垣の百日ぐらし鶏遊ぶ
風垣の怒濤日和の岬村
一灯も洩らさぬ風垣門一つ



—
近詠

松本 鷹根

冬木立

短日の影を伸ばして疎く生く
水鳥の群れて無言の波に乗る
流れ橋急く川風に息白し
丈尽くす枯蘆比良は遠眩し
冬木立自若の足音残しゆく



—近詠—

塩貝 朱千



渦のはじめ

秋 薔薇 揺らしてみても君は来ず
風 に 舞 ぶ ひ と ひ ら 追 ひ ぬ 冬 ざ くら
葉 牡 丹 の 渦 の は じ め の 双 葉 かな
一 羽 翔 ち 群 翔 ち 誘 ぶ 小 春 空
鬼 ご っ こ の 子 ら に 低 空 冬 と ん び

英華採集

松手入れ座敷童子のぴよんと出て

鎌倉平佐和子

東北岩手を中心に伝承されている座敷童子は、子供の妖怪と言われ住みついた家でよく悪戯をするらしいが、見たものに幸福も幸も授けてくれる。松のある家ともなれば、立派な構えを持つ大きな家であろう。松手入れが終わり家の風格も整ったことで座敷童子がここぞとばかりに現れたのかも知れない。季語との取合せに俳味が加わりメルヘン風な仕上げに面白さが出ている。

地獄絵の裏よりのぞく隙間風

宇治田中公子

京都の寺には地獄絵が飾られている所が多い。特に東山の六道珍皇寺などが有名であるが、掲句の地獄絵はどこであろうか。私は、余り好んで見たいとは思わないが女性は意外と平気なようである。隙間風は夏ではなく冬の季語とは言うものの、隙間風が裏から覗いていると見立てた言い回しはかなりぞつとくるものがある。しかしながら隙間風も正面きっては見られないと解くと面白い。

ささやきの風のたまり場落ち銀杏

福知山 松山潤子

会社勤めをしていた時に大阪の御堂筋をよく歩いたが、秋には独特の臭いを周囲に撒き散らしていたのを思い出す。その臭いとは裏腹に焼き銀杏の美味しさは格別である。しかし、掲句のような表現は些か驚きを隠せない処があるものの、季語の持っている本意を最大限に生かしながら逆転の発想を狙った緻密な計算がされている。美的な言葉が、季語によって引っくり返された痛快な心地良さが残る。

冴返る 沼田 巴字

帆 柱 植村 蘇星

冴返る仏塔は舞ふ形して
白梅や天女は空に消えかかる
死とは又微笑なるらむ冴返る
山道に在す石仏冴返る
ランタンの三十一文字春時雨

カレンダーさあの掛け声十二月
生かされて生きて還元去年今年
曙光浴ぶ帆柱きらり千代の春
初詣声の届かぬ遠会釈
初景色古里の山見直せり

狐 丸井 巴水

松の春 北川 孝子

初霜やどこかで魂の抜ける音
一滴の涙も見せず葡萄房
訛声が鰯を囲みて前のべり
落鮎の腹にひとつの使命もち
夜更しや稲荷の狐化けるころ

一月に逢ふねっからのお人好し
迷ひなき九十の路を恵方とす
初日燦俳縁といふたからもの
やはらかき祖母でありたし松の春
あわただし人生の喜怒春一番

記 憶 直江 裕子

冬 雷 伊藤 希眸

身ほとりの軽くなりゆく草の花
大根にも自肅のかたち刃を入れる
壊れやすき香炉とたれか金木犀
秋刀魚焼くけむり記憶を裏返す
栗に爪立ててて手渡す人はもう

一吹き風の風に裸木街白む
枯の道逢魔が刻の靴の音
冬の鴟マンションの窓灯りだす
依代の杉に山鳴り山動く
こんな日の天に冬雷頭を打てり

仏みち 高木 晶子

メカニズム 奥田 筆子

銀紙とひとり遊びの月夜かな
石段を登り一本づつ紅葉
傘立の傘のもつれぬ初時雨
紅葉してゆく元々の仏みち
粕汁をたつぷりと食べ冬眠す

捧げもの枯木に忘れ帰りましょう
冬空に一片理想形の抱きまくら
巫女のごと一夜に樹霊もみづれり
蔦這ひて蔓^はびこりつづけ家枯るる
スプレアの喉澄み泡のメカニズム

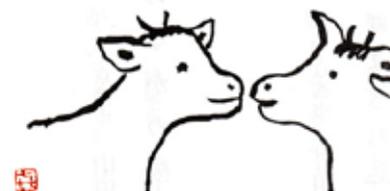
神麓集

きさらぎの雪 井上菜摘子

きさらぎの雪うす目して見えるもの
三面鏡の右にわらんべ雪こんこん
牡丹雪見えぬところを打身して
雪の町けふもどこかで誰かの忌
白鳥の雪にとけゆく近おうみのうみ江海

ロバの耳 村田あを衣

ロバの耳風をきき分け小春なる
冬隣言葉の端の体温差
冬林檎本音は蜜の透きどころ
冬林檎今なら言へる美しき嘘
冬林檎序破急もなく剥き上手



昭和二十一年六月二十五日印刷
昭和二十一年七月一日發行
つぎねふ 第一號

第一號

つぎねふ創刊号



京鹿子集

豊田都峰選

桜紅葉白き日記に降り続く

京田辺 山中志津子

大琵琶の橋煙らせて初しぐれ

初しぐれ伊賀と伊勢とを結ぶみち
窯出しの火焰の欠けら寒露かな

城陽 鷺山 珀眉

手描地図金木屋を落としこむ

深入りの脳内平野未枯るる

稲刈機大地に応へる音響く

啄木鳥の木になりきつて絵本村
粧へる山ふところの深さかな

伊賀甲賀絡む歴史や柿すだれ

京 都 井尻 妙子

こめかみに秋思の霧の濃かりけり
指揮棒の下りて黄落いつせいに

福 山 亀井 福恵

晩秋の耳が大きくなる話

木の実降る予定なき日のよく晴れて
おとうとの嫁の丸文字新米着く

肩書も正論もなし懐手

柿すだれ中二階より母のこゑ

曼珠沙華つひに燃えつき症候群

桜もみぢかざし晩年再考す

心字池は雲のゆりかご鉦叩

気まぐれな丹後の雨や冬の虹

福 知 山 西村 白籽

魂のゆるる日射しや川すすき

追憶の褪せて色なき風の郷

石原 孝人

城崎や恋はさざなみ初しぐれ

夕日受け肩の荷おろす吊し柿

あの親子来るまで待たう冬紅葉

「冬紅葉モカの香に酔ひくれなぬに

京 都 菊池 和子

ほほ笑みに勝るものなし実南天

編みさしの手の平のしわ初時雨

銀杏散る誰の胸にもある故郷

白鳥の羽搏く時は水に立つ

寂しがりやの帽に止む赤蜻蛉

高 槻 安田 優歌

大いちよう点描となる黄葉しぐれ

恋多き女よ金銀木の葉髪

団栗ころりポケットへ仕舞ふ一句

童話のやうな満月翁と尉

行く雲の野に晩秋の椅子ひとつ

大 阪 本郷 公子

晩秋のかそけき音やスローライフ

山秋や妻恋ふこゑの夕暮れて

冬立つ日ロールキャベツの透きとほる
日を透かす名残りの彩や冬紅葉

松手入れ座敷童子のびよんと出て

鎌 倉 平佐 和子

千両の実のうつつすと小女 A

鬼の子を突つき出していて生家

フランスパン前かごに入れ街小春

地獄絵の裏よりのぞく隙間風

神丘の日溜りに群る秋の蝶

草紅葉京へ八里の標石

可憐夜に磨く遺品や冬牡丹

ささやきの風のためり場落ち銀杏

福 知 山 松山 潤子

軒浅き閉ぢし紺屋や初しぐれ

冬紅葉働く母の手の温み

石テーブル囲む秋日のカフェテラス